

もう一度行ってみたい猯鼻溪

宇敷 辰男

仙台から旧奥州街道、国道四号線を北上し岩手県に入ると平泉の手前に一関がある。一関から左手八^キ程内陸側に^{げんびけい}厳美溪があり、反対側右手へ十六^キ程入った所に^{げいびけい}猯鼻溪がある。

厳美溪は、栗駒山の噴火で積み重なった岩石が急流に削られ、荒々しい流れとゆつたりした深淵が楽しめる約二^キの溪谷である。一方猯鼻溪は、北上川の支流が石灰岩を侵食し、高さ百^キの断崖が両岸にそびえる約二^キの溪谷である。一^キ程北には幽玄洞の鍾乳洞がある。

昭和時代の終りに妻と初めてここを訪ねた時、厳美溪もさる事ながら、静かな流れの舟下りを楽しめる猯鼻溪が気に入った。

猯鼻溪の舟下りは、所要時間九十分程である。船頭さんが操る舟がゆつくりと発着所を出発すると優しい水音が流れ、川魚の群れが泳ぐ浅い清流の底が澄んで見える。緩やかに蛇行する川に沿って奇岩が現われ、野鳥の声が響きわたる溪谷を見上げると上空に広がる雲や風もゆつくり流れている。

中間地点の船着場で舟を降りると、天に向かって岸壁がぐるりとそびえ立っていた。高さ一二四^キの大岩壁の中段に獅子の鼻のような突起が見える。猯鼻溪の名の由来になった^{ししがはな}獅子ヶ鼻の奇岩だ。

保津川や天竜川のような激流の舟下りと違って、船頭さんがひとりで折り返し往復する。一本の竿だけで川を下りながら「げいび追分」を唄う。その声は岩壁にこだまし静かな溪谷に響きわたる。

初めて訪ねたのがどの季節だったか定かではないが、春は桜や藤や新緑、夏は深い緑や涼しげな流れ、秋は色づく紅葉の錦が楽しめる。

戦国時代、伊達政宗は厳美溪を賛美したが、猯鼻溪は明治時代に知られるようになった。ネット検索してみたら、藩の役人に知られると接待が大変なので、風土記や絵図に溪谷の存在は隠していたという逸話が載っていた。

冬に行ったことはないけれどコタツ舟が出るそうだ。今度は熱々の鍋で温まりながらもう一度、船頭さんの唄を聴いてみたい。